

小学校における歌唱表現学習の試み —「音読から歌唱へ」を視点とした実践事例—

加 藤 晴 子

A trial of Song Expression Learning of an Elementary School —The Practice Example from a Viewpoint of Development to Singing From Reading Aloud—

Haruko KATO

Abstract

Activity to understand music generally is indispensable to perform music expression. The activity is arranged to 3 greatly. It is learning to have an image of music toward, to understand structure and a characteristic of music, to know a background and generation of music. It becomes the starting point of expression learning to image. At the same time 3 are involved with them each other. However, the activity that they are involved in effectively is not performed by learning enough. In this study, consideration was performed about the learning that a child learned structure of music from in an image and form connected directly with and learning to be able to tie it to expression. Class practice was performed by an original learning plan. The learning paid its attention to development from reading aloud to a song. As a result, through activity to catch how poetry was sung, the children were able to be interested in structure of music. The children were able to get an opportunity of song expression.

Key words

song expression, singing, reading aloud, elementary school,

1. はじめに

音楽表現を実現するためには、楽曲を総合的に理解するための活動が欠かせない。それらは、子どもたちが豊かな表現を作り上げるための要となるのであり、指導では、子どもたちにいかに楽曲を総合的に捉えさせるか指導者の工夫が求められる。楽曲を総合的に理解するために必要な学習活動を整理すると、大きく以下ようになる。

- ①曲のイメージを持つ、膨らませる学習。
- ②曲の構造や特徴等を理解する学習。
- ③曲の背景や生成について知る学習。

①②③は相互に関わり合うものである。曲のイメージを持つ、イメージを膨らませる学習は、表現学習全体の起点となる。とりわけ、歌唱学習では、詩はイメージを喚起する上での大きな要素の一つである。同時に、曲の構造や特徴を捉える際にも詩との関わりが大きなポイントとなる。

また、作品の背景や生成について知ることによって、曲のイメージが一層深まることが期待される。

では、これらの活動は一般にどのように行われているのだろうか。①についてみると、子どもたちは、詩を読む、旋律を歌う、作品の生成について知る等の活動を通して、イメージを膨らましていくことができる。しかしながら、実際に歌を表現する段階になると、子どもが抱いたイメージや気持ちとは無関係に、教師が歌わせたいように指導することが多いように思われる。

②についてみると、多くの場合、曲のイメージとは切り離れた形で学習が行われることが多いように思われる。例えば、楽典や発想記号、形式の理解等の学習が、歌唱表現とは無関係に独立したものとして行われ、子どもが抱いたイメージとは乖離した状況で活動が展開されることである。そのような学習では、曲の構造や特徴を歌唱表現に繋げることは困難であろう。

③についてみると、曲の背景や生成について知ことはイメージの喚起に繋がるものの、学習が単に知識の習得に止まる傾向がみられるように思われる。学習したものを表現に結びつけていく上では、何らかの手だてが欠かせないといえる。

そこで本研究では、子どものイメージと直結した形で曲の構造を学び、それを表現に繋げていく学習について実践的に考えていきたい。本研究で対象となった子どもたちは、これまで、筆者による学習プランに基づいた活動「イメージしたことや伝えたいことを起点とした学習」(全2回)を体験してきた。これまでの学習内容、成果、問題点は以下の通りである。本研究では、下記の第2回目の問題点を取り上げ、それを解決することをねらった学習プラン(全2時)を作成し、授業実践を行った。学習では第1時に、声の表現における表現の目的と表現方法の関係に気づくこと、また、表現の多様性に気づくことをねらいとし、第2時では、音読による表現と歌唱表現の違いを捉え、その上で、歌ならではの表現の特徴を踏まえて歌うことをねらいとする。なお、本稿では第2時の学習内容を分析的に捉えながら表現学習の方法について考察を行う。

【これまでに行った授業実践】

(1) 第1回目について¹⁾

〈ねらい〉詩からイメージを膨らませて自分が伝えたいことを明らかにし、それを歌で表現する。

〈成果〉子どもたちは、イメージを膨らませて思い思いに歌うことができた。

〈問題点〉イメージして歌うことができたものの、自分の思いを十分に表現することが出来ず、子ども自身が満足するような歌唱に至らなかった。そこから、歌唱技能が十分でないことを子ども自身が課題としてみいだした。

(2) 第2回目について²⁾

〈ねらい〉第1回目の問題点として感じた歌唱技能の習得を目指す。

〈成果〉子どもたちは、声を出すために身体をどのように使うと良いのかを意識しながら歌うことができるようになった。

〈問題点〉身体のコントロールについて意識できるようになったものの、子どもたち自身が満足するような歌唱表現には至らなかった。多くの子どもたちが、音読では気持ちを伝えることができるにもかかわらず、歌唱になると十分に気持ちを伝えることが出来ないと感じた。それを自分たちの歌唱の課題として子どもたちが認識した。

2. 学習プラン

2-1 学習プランの特徴と概要

本学習プラン（全2時）の特徴は、以下のような活動を行う点にある。

- ①歌で表現することの意味を感じとるために、様々な声の表現を味わうと共に、それぞれの表現には目的に応じた様々な工夫がされていることに気づくような活動を行うこと。
- ②歌詞とリズムおよび旋律の関係に着目し、作曲者がどのようなことを表現したかったのかを考える活動を行うこと。
- ③作品のリズムや旋律の特徴を捉え、自分はどの様に表現したいのかを具体的に考えて歌う活動を行うこと。

本学習プランの概要は以下の通りである。

- 1) 対象者、授業日時、場所：倉敷市立琴浦東小学校第6学年1組（在籍児童36名）2007年12月19日（水）第2校時、3校時、音楽室
- 2) 授業者：逸見学伸、加藤晴子
- 3) 題材名：音楽ならではの秘密を探ろう。
- 4) 指導目標
 - ①様々な様式の声の表現を聴いてそれぞれの表現の特徴を感じ取り、表現を味わう。
 - ②歌詞とリズムおよび旋律の関係から、作曲者が表現したかったことや伝えたかったことを感じ取る。
 - ③自分たちが捉えた作品のリズムや旋律の特徴をもとに、どのように表現すると良いかを自分たちで考えて歌唱表現する。
- 5) 指導計画（全2時）

〈第1時〉

 - ①様々な声の表現を聴き、それぞれの表現方法の特徴を感じ取る。
 - ②表現にはそれぞれの目的があり、目的に応じた表現の工夫がなされていることに気づく。

〈第2時〉

 - ①『ふるさと』について、詩あるいは詩から感じられることと旋律及びリズムの関係を捉える。
 - ②作曲者が自分の思いを伝えるためにどのような工夫をしているのかを視点として、詩とメロディ及びリズムの関係を中心に、音楽構造の特徴を捉える。
 - ③作品の特徴を活かして、気持ちの高まりや伝えたいことを歌唱表現する。
- 6) 題材設定の理由（略）
- 7) 教材について（『ふるさと』高野辰之作詞、岡野貞一作曲）

『ふるさと』は既習曲であり、子どもたちがよく歌い込んでいる曲である。そのため本曲は「音楽ならではの秘密を探る」というこれまで子どもたちが体験したことのない学習に、余裕を持って取り組むことができる教材といえる。このことから「音楽ならではの秘密」を生かして歌ことによって表現がどの様になるのかを子ども自身が感じ取ることができると考える。以上から本曲を教材として選択した。

8) 子どもの実態

本学級の子どもたちは、音楽の授業をはじめ校内音楽祭、朝の会や帰りの会等を通して様々な曲に親しんでいる。また、国語の学習では音読を盛んに行っていることから、声で表現すること

に対する子どもの興味も高い。子どもたちは、歌唱表現に関して、本研究の一連の実践を通して、イメージ、歌唱技能等について学習してきた。一方、本実践のような、音楽構造に着目した学習は初めての体験である。

9) 学習指導案

第1時（略）

第2時

目標①作曲者が思いを伝えるためにどのような工夫をしているのか、音楽構造の特徴を見つける。 ②作品の特徴を十分に活かして気持ちの高まりや伝えたいことを歌唱表現する。		
学習活動	教師の支援・指導上の留意点 (T1：逸見, T2：加藤)	評価の観点
1, 本時の活動のめあてを認識する。	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の活動を振り返る。(T1) ・本時の活動のめあてについて話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時にめあてを認識できたか。
2, 『ふるさと』に見られる音高やリズムの変化、繰り返し等について考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・1段目から4段目の中で音高やリズムの変化、繰り返し等が最も見られる所を探させる。(T1) ・リズムの変化や繰り返しが見られる部分を取り上げてリズム打ちさせ、変化や繰り返しを認識させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・リズムや音高の変化、繰り返し等に気づくことができたか。
3, 3段目の詩「夢は今もめぐりて」について考える。 ・身近な話題をもとにイメージを膨らませる。 ・イメージをもとに音読する。 ・作曲者の意図を捉える。 ・作曲者の意図を感じながら歌唱する。	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちにとって身近な話題である運動会で行った組体操を取り上げ、思い出すことを自由に発表させる。 ・自分たちのたくさんの思い出をどのようにしたら1行（「夢は今もめぐりて」）で伝えることができるか考えるように促し、音読させる。 ・イメージしたことを歌で表現するためにはどうすると良いか考えることをきっかけとして、詩の中で作者が伝えたかったことと音楽の構造の関係について考えさせる。(T1) ・詩の中の伝えたいことや気持ちの高まりと活動2で捉えた音高やリズムの変化、繰り返し等との関係から、作曲者の表現の意図を考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「夢は今もめぐりて」の歌詞について、イメージを膨らませることができたか。 ・音楽構造や作曲者の意図について、積極的に考えることができたか。
4, 言葉が音楽になった時に生じる変化に注目して歌う。 ・言葉と音楽の関係に気づく。 ・作曲者の意図と自分の伝えたいことを関係づけながら歌唱する。	<ul style="list-style-type: none"> ・音読と歌の特徴を比較しながら、歌ならではの表現に気づかせ、興味を持たせる。(T2) ・部分を取り上げ、リズムや音高の変化をつけない場合と変化のある場合（楽譜通り）の双方で歌唱し、音の進行やリズムによって生じるエネルギーに気づかせる。 ・上記をもとに、詩と音楽の構造、特徴（旋律やリズム、繰り返し）との関係を捉えさせる。 ・旋律やリズム等を活かして、自分なりに歌唱表現するよう促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音読との違いに気づくことができたか。 ・音楽の構造と自分の伝えたいことやイメージしたことを関係づけて歌おうとしたか。

5. まとめ ・ワークシートを記入する。	・学習を振り返りながらポイントを整理し、まとめとする。(T1)	・ワークシートを記入できたか。
-------------------------	---------------------------------	-----------------

10) 評価の観点

- ・歌詞と音楽（リズム、メロディ）の関係に気づき、音楽ならではの表現に気づくことができたか。
- ・音楽作品の構造に着目し、その特徴を感じ取ることができたか。
- ・音楽ならではの表現を感じ取って、自分が伝えたいことやイメージを歌唱表現できたか。

譜例1 『ふるさと』（高野辰之作詞・岡野貞一作曲）

3. 学習活動

前述の学習プランをもとに、授業実践を行った。ここでは、子どもたちが学習曲である『ふるさと』の音楽構造を捉え、作品ならではの秘密を考える学習活動について考察する。

3-1 指導のポイントと子どもたちの活動

ここでは、学習のポイントを活動毎に述べる。学習は、以下の（1）～（5）の順序に進められた。

（1）『ふるさと』の音高やリズムの変化に気づく

子どもたちは、第1時の学習で、声の表現における長さの変化、リズムの変化（テンポ、繰り返しを含む）、声質、等について学んだ。それをもとに、第2時では『ふるさと』の中で、長さの変化やリズムの変化、繰り返し等が最もみられる部分を見つけることから学習を始めた。それについて子どもたちは全員が、9～12小節目であると回答した（譜例1参照）。

学習では、以下のような活動を行った。

- 1) 黒板に掲示された楽譜に、曲の冒頭から、教師がマジックで音符を線で結びつけ、9～12小節目が最も音の高さが変化していることを確認した。

2) 黒板に掲示されたリズム譜を用い、各部分(4部分: 1~4小節目, 5~8小節目, 9~12小節目, 13~16小節目)のリズムを確認し、どの部分にリズムの変化が多いのかを確認した。

これらの活動を通して、子どもたちが気づいたのは、以下の点である。

- ・音高については、1~4小節目, 5~8小節目, 13~16小節目に比べて、9~12小節目では同じ高さの音が少ないこと。
- ・リズムについては、1~4小節目, 5~8小節目, 13~16小節目が同じリズムであるのに対して9~12小節目リズムが違うこと、そこには繰り返しのリズムがあること、等である。

(2) 9~12小節目のリズムに変化について考える

9~12小節目ではなぜリズムに変化があるのかを考える学習を行った。9~12小節目の歌詞「夢は今もめぐりて」を取り上げ、どのような意味なのか、どのような感じなのかを考える学習を行った。子どもの「子どもの頃に思った夢は、今も頭の中で思い出されるということ」という回答をもとに、運動会で行った組み体操を例に挙げ、エピソードや感じたこと等を自由に発言する場を設けた。それをきっかけとして、『ふるさと』の歌詞で伝えたいことを子どもたちが考える学習を行った。

(3) 9~12小節目の歌詞を音読する

子どもたちが運動会の組み体操で感じたこと、思い出等、発言したことを全て歌詞「夢は今もめぐりて」に入れて音読してみるという試みを行った。音読の後に歌唱を行った際に、子どもたちはのびのびと歌うことができたものの、歌唱後の「音読で自分の思いを十分に伝えることができたか」という教師の問いに対しては、子どもたちは全員不満であると答えた。子どもたちが不満と感じた理由として、以下のような発言がみられた。

- ・みんなと同じ言い方だった。
- ・運動会のことを入れたのに、相手には運動会のことが伝わっていない。

(4) 自分の思いを音楽で表現する

この学習では、『ふるさと』の音高やリズムを振り返った。音読だけでは十分に表現できなかったことをふまえ、作曲者が行った工夫に自分の思いをのせて歌う活動を行った。

次に、1~4小節目, 5~8小節目, 13~16小節目ではリズムが全て同じであることに着目した。それらを全て同じように歌いたいのか、13~16小節目をどのように歌いたいかを教師が問いかけた。子どもからは「夢を思い出して忘れてはいけないということをもっと表して歌いたい」という発言があった。

(5) 歌詞やイメージとリズムと音高の関係を捉える

ここでは各部分を取り上げて、言葉のまとまりや発語とリズムあるいは音高変化を視点として教師が比較を交えて歌唱例示を行った。視点は以下の通りである。

- ① 9~12小節目にみられるリズムのたたみかけの効果。
- ② 13~16小節目について、歌詞「忘れがたきふるさと」にみられる音の跳躍の効果。
- ③ 歌詞から受けるイメージとリズムの関係。
- ④ 言葉のまとまりを意識した歌唱。

4. 考察

本学習で子どもたちは、曲の構造に大いに興味を示し、学習を通して、歌唱するためには曲のイメージと構造や特徴との関係を捉えて表現を工夫することが必要であることを認識できた。とはいっても、子どもたちは、歌唱においては音読で得られるような表現の満足感を得ることが出来なかった。何が問題なのか、ここで、子どもたちのつまずきを整理し、それをもとに今後の指導のあり方を探りたい。

子どもたちのつまずきについて、リズム、テンポ、音高の各観点から表現する際の音読と歌唱表現を比較しながら整理すると以下ようになる。

表1 子どものつまずき

観点	音読でできること	歌唱表現で難しいこと
リズム	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のリズムで表現できる。 ・表現に応じて音価を自由に伸縮できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・決められたリズムで表現しなければならない。 ・言葉から感じられるリズム感と音楽リズムに違いが感じられる場合がある。
テンポ	<ul style="list-style-type: none"> ・自由なテンポで表現できる。 ・緩急を自在につけることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一定のテンポで表現しなければならない。 ・テンポを保持しなければならない。
音高	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の抑揚をもとに自由な音高で表現できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・決められた音高で表現しなければならない。 ・跳躍音程のような言葉の抑揚が強調された音の動きや、イメージと異なる音の動きがある。 ・自分にとって出しにくい高さの音がある。

子どもたちは、音読では自信をもつてのびのびと表現ができるのに対し、歌唱では表現が音読ほど立体的ではなく、むしろ平板な表現に止まるものであった。このことは、表現に表1に示したように、音読ではリズムやテンポ、音高が自由であるのに対し、歌唱では決められたリズム、一定のテンポ、決められた音高で表現することに子どもたちが不自由を感じていることによると考えられる。ここで、リズムと音高についてそれぞれをみていながら学習として何が必要かを考えていきたい。

4-1 リズムについて

音読の際の歌詞は、文節単位でみるならば、ほぼ等時・等拍的に表現されるものの、部分と全体の関係からみるならば、かなり自由なリズム、いわば非等時・非等拍的に表現が行われている。これに対し、歌唱は拍子という、いわば等時・等拍を基盤とした枠組みの上に成り立っている。このことから、子どもたちは非等時・非等拍的なものを等時・等拍的な枠組みの中で表現しなければならないことに不自由を感じたのではないだろうか。

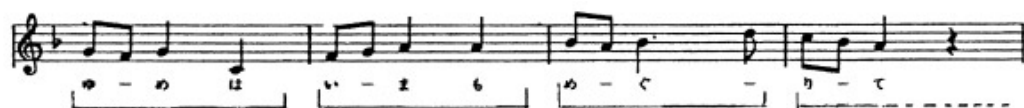
したがって学習では、拍子という枠組みの中で、歌詞をどのように表現するのかということについてのアプローチが必要ではないかと考える。まず必要なのは、曲を捉えるという面から、リズムがもつ固有の意味について知る、解釈する学習である。そこでは、歌詞との関係、ニュアンスとの関わりが視点となると考える。つまり、リズムが単なる音価の羅列ではなく、言葉を介し

て意味をもったものとして捉えられることが必要なのではないかと考える。

例えば、『ふるさと』の冒頭の歌詞にみられる「うさぎ」では、歌唱する際に、各モーラ「う」と「さ」と「ぎ」を等価で順番に発するというだけでなく、「うさぎ」という語としてのまとまりとして発することをより明確に意識することが必要である。その結果、そこには自ずから微妙な音価の変化が生じるであろう。これが非等時的・等拍的要素への対応になると考える。同時に、その詩の中でニュアンスから語を捉えることもリズムを意味のあるものにする上で欠かせないと考える。また、「追いし」についてみると、語感と同時に、各モーラを発するスピード感を捉え、リズムに活かしていくことが必要ではないだろうか。「夢は今もめぐりて」では、リズム（♪♪♪譜例2参照）の畳みかけによって生じる高揚感を感じ取り、それを表現につないでいくことが有用ではないだろうか。

これらを表現として具現するにあたっては強弱のコントロールが欠かせないと考える。子どもたちの学習に限らず、歌唱表現では、音読で表現する際に生じる非等時・非等拍的な要素について、いわゆる作品全体に記された強弱とは別に、微妙な強弱のコントロールで対応していくことである。子どもたちの学習においても、その点について体験的に学ぶことが必要ではないだろうか。このような学習にあたっては、十分に詩を読み込み、それを学習を反映させていくことができるのではないかと考える。また、強弱のコントロールについては、音高との関係からも捉えていくことが欠かせない。

譜例2 「ふるさと」9～12小節目



4-2 音高について

音高については、音読では言葉のもつ抑揚を基盤として表現の工夫が自由になされるのに対し、歌唱では言葉のもつ抑揚を基盤としながらも、抑揚が強調されたり、言葉の抑揚とは異なる音高の推移がみられることがある。これらは作曲者の音楽的要求によるものであり、そこに歌唱ならでは、また作曲者ならではの表現が存在する。とはいえ、それらは子どもたちのにとっては、ある種の不自然さに感じられることもあるといえよう。

したがって学習では、音高推移について、例えば、何故、同音進行なのか、上行するのか、下行するのか、跳躍するのか等について、その意図を捉えることが必要ではないかと考える。その際に、歌詞の高低アクセントと旋律の音の進行を比較してみる学習も有用ではないだろうか。『ふるさと』では、旋律の大半が言葉の高低アクセントに一致している。その動きを捉えると同時に、歌詞の高低アクセントと全く異なる音の動きをしている部分（例えば、10小節目歌詞「いまも」の部分、13小節目歌詞「がたき」、譜例3参照、語の高低アクセントを一を用いて示す）について、なぜそのようなになっているのかを子どもたちが自分で考えてみる学習である。また、これらの学習では、リズムとの関係も捉える必要がある。

このような学習では、自分のイメージに合うように短い旋律を創作してみることも有用ではないかと考える。どのような音高推移にすれば自分のイメージを具現することができるのか、試行

錯誤することを通して、音の動きについて体験的に捉えていくことができるのではないだろうか。

譜例3 「ふるさと」10小節目歌詞「今も」の部分



13小節目歌詞「がたき」の部分



5. おわりに

本研究では、学習プランに基づいた授業実践の中から、音読表現から歌唱表現への発展を視点として、そこでの子どもたちの歌唱表現で生じたつまずきをもとに学習方法について考察した。学習を通して、子どもたちは、詩を音読する際の要素と、それを歌唱する際に必要とされる要素について、共通点や相違点を認識し、音読表現と歌唱表現は密接に関わり合うものの、両者は単純にイコールでは繋がらないことに気づくことができた。両者をどのように繋げていくのかが、子どもたちの歌唱表現学習での一つのポイントになるのではないかと考える。そのためには、歌唱表現学習の中で、リズムや音高について、なぜそのようなリズムになっているのか、なぜそのような音高推移になっているのか等について掘り下げていく活動が必要である。

また、今回は和声については触れなかった。和声進行による表情やその変化を味わうことは表現を行う上で欠かせない。子どもたちは、旋律やリズムと同時に和声の変化を感覚的に捉えることはできている。次の段階として、それを意識化することが必要であり、和声が言葉の高低アクセント、抑揚、リズムとどのように関わっているのか、どのような効果がもたらされるのかを知ることは、歌唱ならではの表現を十分に味わうことに繋がると考える。したがって、このような和声も含め、作品の音楽構造、音楽的特徴と表現の関わりについて、分析的な視点からの学習も有効であると考え。さらに、なぜ作曲者がそのようなリズムや音高、和声を用いたのか等、作曲者との共感あるいは表現効果という視点からも学習が可能であると考え。今後、これらの点を踏まえ、歌唱表現学習について、さらに実践的に研究を進めていきたい。

謝辞

本研究にあたっては、岡山県倉敷市立琴浦東小学校の協力をいただいた。子どもたち、逸見学伸先生、校長先生はじめ諸先生方に心よりお礼申し上げます。

注

- 1) 『イメージしたことや伝えたいことを表現するための歌唱技能習得の試み—小学校における授業実践—』加藤晴子・逸見学伸、岐阜聖徳学園大学『岐阜聖徳学園大学研究紀要〈教育学部編〉』vol. 47, p. 159-175, 2008.
2
- 2) 『小学校の歌唱学習における発声指導の試み—声や身体を意識化を視点とした授業実践—』加藤晴子、日本声楽発声学会『日本声楽発声学会誌』vol. 36 p. 34-42, 2008. 3

主要参考文献, 資料

「言葉のリズム学習としてのヴォイス・プロダクションー「お祭り」の創作学習」『日本の伝統的なリズムの学習に関する基礎的研究ー語られる言葉から歌われる言葉へー』奥 忍, 平成16～19年度科学研究補助金成果報告書, pp. 129-136

『教師のための合唱指導と実践』渡辺昌治, 音楽之友社, 2001

『小学校段階的な合唱指導第2版』竹内秀男, 教育出版, 2002

『新編 新しい音楽 教師用指導書研究編 1～6』東京書籍

『小学音楽 音楽のおくりもの教師用指導書研究編 1～6』教育出版

『小学生の音楽 教師用指導書研究編 1～6』教育芸術社